

平成23年度
福岡大学 入学試験問題

2月4日(本学・各地)

[試験場：福岡・東京・大阪]

【医学部(医学科)】

教科	時間	配点	科目
外国語	70分	100点	英語Ⅰ, Ⅱ, リーディング, ライティング
数学	90分	100点	数学Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ, 数学A, 数学B[数列, ベクトル]
理科	120分	200点	物理Ⅰ, Ⅱ[力と運動, 電気と磁気, 物質と原子(原子, 分子の運動)], 化学Ⅰ, Ⅱ, 生物Ⅰ, Ⅱから2科目選択
二次選考	—	重視	小論文(60分), 面接・調査書 ※

(A:医学科用, C:理系数学, 理科冊子:医学科用)

※一次選考(「英語」「数学」「理科(2科目)」の総合点で選考)合格者に対し、二次選考を実施(小論文、面接および調査書により総合的に選考)。なお、小論文は一次選考日に実施しました。

⑦⑦ X 2011年度 小論文

問題冊子 (1～3ページ)

注意事項

- (1) 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見ないこと。
- (2) 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。
- (3) 解答は別に配布する解答用紙の該当欄に正しく記入すること。ただし、解答に係のない語句・記号・落書き等は解答用紙に書かないこと。
- (4) 問題冊子の余白等は適宜使用してもよい。

次の文章を読み、思うことを400字程度でまとめなさい。

薩と長についてふれた以上、明治維新をつくったもう一つの存在である土についてのべねばならない。薩長土という三藩それぞれの政治的・人間的個性の三様ぶりがないければ、明治維新はああいう形ではおこらなかったにちがいない。以下は、江戸期日本の多様さという、日本史のとらえ方にもかかわりがある。土佐藩（高知県）は、魅力的である。すくなくとも他の二藩とはきわだって異なる藩風をもっていた。たとえば内面に藩士の階層間（上士と下士）の反目問題という緊張をかかえていたこと、それに下士階級に天性ともいうべき自由児が多かったことである。

「^{てきとうふき}倜儻不羈」という漢語は、まことに異様な字面が四個もならんでいてなじみにくい。しかし江戸期の知識人のあいだでは、ごくふつうのことばだった。ある種の独創家、独志の人、あるいは独立性のつよい奇骨といった人格をさす。^{てき}倜は“すぐれていて、拘束されないさま”で、^{とう}儻は“志が大きくてぬきんでている”こと、^き羈は“馬を制御するたづな”、不羈は“拘束されない”ということ。漢語としては紀元前から存在した。早稲田大学をおこした大隈重信が、自分の出身藩である肥前佐賀藩（薩長土肥の肥）のガリ勉主義の藩風を『^{おおくまこうせきじつたん}大隈侯昔日譚』のなかでののしっている。「一藩の人物を悉く同一の模型に入れ、^{ことごと}為めに倜儻不羈の^{きしやう}氣象を亡失せしめたり。」大隈がそのようになげいたように、肥は、全藩の子弟を組織して一種類の学制の中につめこみ、定期的に試験を施して、落第すれば先祖代々の家禄まで削るという、恐怖をもって一藩をかりたてた。しかも思想は朱子学というドグマで統一されていた。このおかげで多くの秀才を出すことになったが、倜儻不羈の氣象を亡失させた、と大隈はなげくのである。かれが後年、早稲田の地に一私学をおこした動機は、この批判のなかにもある。

この点、土は倜儻不羈の^{いってはんばい}一手販売のような土地だった。元来、土佐人には風土的精神として拘束を好まないところがあった。中江^{ちやうみん}兆民（1847～1901）の例をあげてみる。兆民はいうまでもなくルソー思想の明治日本への移植者である。兆民の生涯をみると、強烈なほどに自律的ではあったが、他から拘束されることを病的なほど好まなかった。ただし、^{がんしつ}頑質とはいえない。「頑質」という用語も、江戸期、人格批評として、よく用いられた。頑固者などといえれば一種の美質のようにきこえるが、たとえば

長の吉田^{しょういん}松陰などは、門人を教える場合、これをマイナスの評価として用い、固定概念にとらわれて物や事が見えないおろかさという意味につかった。兆民の場合、世間や人間を見るとき、ことさらに自分の思想の小窓からのぞくことをせず、自分の思想にあわない人物も、そこに魅力を感じればたかだかと評価した。かれは『民約論』の訳者ながら明治天皇を敬慕し、西郷隆盛を敬愛し、また官権思想の俊才である井上^{こわし}毅も好きであった。つまり倜儻不羈でありながら、頑質ではなかった。兆民が尊敬し、その生前を知っていた十四歳上の土佐人坂本竜馬も、この気質群の中の人だった。

竜馬は、一家の末っ子だった。早く母親をうしなったため、三つ年上の姉の乙女に、十九で江戸へ出るまでのあいだ、いわば^{はぐく}哺まれた。毎朝、この姉に髪を結ってもらう。髪を^す梳き、まげをきりっと束ねて^{もとゆい}元結をつよくむすんでもらったあと、せっかく出来あがったまげをぐさぐさにゆるめるのである。竜馬の写真は長崎で写したのがよく知られているが、この写真でも、^{けっぱつ}結髪の体をなさないまでに崩れている。癖という以上に、性分だったらしい。竜馬における不羈独立の性格が、その生涯でもっともよくあらわれたのは、浪人結社「海援隊」の着想と結成だった。その“約規”に、脱藩浪士をもって入隊の資格とする、とある。この浪人結社は、海運会社であり、商品相場の会社であり、開拓会社であり、また機に応じて海軍にもなりうる組織だった。さらには藩長土および越前福井藩から、船舶の現物や金品による出資を仰いでいたから、一種の株式会社であった。べつな表現でいえば、これが重要だが、私設の“藩”を既存の諸藩の援助によってつくったともいえる。さらには、視点である。長崎を本拠としたことが、かれの観察眼を変えた。かれののぞみは、海外貿易にあった。そのためには、統一国家の樹立が必要だった。かれにとって革命は、^{こんしん}渾身のしごとではなかった。それにかれは長崎という幕末政争の圏外にいたため、遠見の火事のように京都の情勢がよく見えた。好機ごとに京都にあらわれては、薩長の手をにぎらせたり、大政奉還の奇手を演出したりしたのは、上記の諸条件をかれの才質が活性化させたことによる。ふと思うことだが、一介の浪人の力で薩長という二大雄藩の握手が可能なのは、発言の立脚点として、海援隊の勢力があったとあっていい。さらにかれは役人にはならないということをつねづね語っていた。大政奉還という奇手が可能だったのも、かれが新政府に官職をもとめるということせず、いわば^{むし}無私になることができたからだ。無私の発言ほど力のあるものはない。まことに、倜儻不羈というほかない。

話がかわるが、土佐人には“南海道”というものの気質が濃密だったのであろう。“南海道”は七世紀末、文武天皇^{もんむ}のときに六道の一つとして制定された地域で、紀州(和歌山県)と淡路と四国の六カ国をさす。土俗として平等意識がつよく、そのため過剰な敬語が発達しなかったなどの共通点がみられるが、後世、その気風が、磨耗せずに濃密にのこったのが、土佐だったといえる。土佐に沈澱した理由は、いくつか考えられる。決定的なことは、他の五カ国が戦国期に一国を統一する地生え^{じば}の領国大名をもたなかったのに対し、土佐だけは長曾我部氏^{ちようそかべし}をもった。長曾我部氏が関ヶ原の敗者としてつぶされ、かわって江戸期、遠州掛川(静岡県西部)から小大名の山内氏が入ってきて、土佐人を抑圧したことも、その気質群を結束させることになった。この意味で、土佐藩は“進駐軍”だった山内侍と地生え侍の二元制だったといえる。地生え侍は、支配階級である山内侍から屈辱的な土下座の礼を強いられつづけ、幕末以前から、拘束のない世を夢見るようになった。天保年間頃から土佐の庄屋たちも、天皇という超越的な一点を仮想するようになった。その一点を仮設しさえすれば、上下構造という解きがたい数式が一挙に解決できる。目の前の上士どころか、藩主も将軍もただの庶民になり、平等になってしまうのである。

以上、土佐のことをのべたというより、薩長土肥という四藩がいかに別国のように性格がちがっていたかということのハナシである。こんにちの日本はいい国だと思うのだが、発想の多様さについては、心もとない。そういう場合、江戸期の多様さを思うと、心づよくなる。この多様さは、ある時期のヨーロッパの諸国間のちがいをさえ、ふと思えばあわせてなくなってしまうのである。

【司馬遼太郎：この国のかたち(全6冊)、文藝春秋(東京)、1993年より】

志望学部 学科コード	MM	受験 番号		氏名	さくらの個別指導(さくら教育研究所)
---------------	----	----------	--	----	--------------------

欠席欄
(受験生は記入しないこと)

小論文解答用紙

.....

.....

.....

.....

..... 100

.....

.....

.....

.....

.....

..... 200

.....

.....

.....

.....

.....

..... 300

.....

.....

.....

.....

.....

.....

..... 400

.....

.....

.....

.....

.....

..... 500

評 点